

# 『真宗教旨陽駁陰資弁』における四法三願について

中 村 薫

本論では、小栗栖高頂の『真宗教旨』を元に繰り広げられた中国浄土教と浄土真宗との間の教学論争について、就中、四法と三願について考察を加えていく。(1)

## 四法

小栗栖香頂は『真宗教旨』で、

大量寿経を真実の教と為す。名号を真実の行と為す。第十七願に出ずる。三心を真実の信と為す。第十八願に出ず。必至滅度を真実の証と為す。第十一願に出ず。大導師有りて教は名号を以て、衆生は之を聞信し、而も往生を得る。是れ四法と為す。

と、四法について述べている。『大無量寿経』を真実の教とし、名号を称名することを真実の行とし、第十八願の至心・信樂・欲生の三信を真実の信とし、必至滅度に至ることを真実の証とし、教、行、信、証の四法と十七願、十八願、十一願の三願を明らかにしている。つまり、教は名号を以てその体となし、衆生はどこまでも名号のいわれを聞信して往生の素懐を得ることこそ四法の根本であるという。これに対して、楊仁山は、きつぱりと、

此の章は、すべて宜しく刪るべし。

と全面的に排除すべきであるという。すると小栗栖香頂はすかさず、

四法三願は、本宗の元首なり。命脈なり。若し之を刪さば、是こそ本宗の頭を断ずるなり。本宗の命脈を褫うなり。

と、反論するのである。小栗栖香頂は、この四法三願こそ浄土真宗の真宗たる所以である。これこそ肝心要であるので、もしこれを削除してしまうことは浄土真宗の頭首を断ずるようなもので、命取りになるといっているのである。そして、貴方は中国で浄土真宗の布教を許したくないために、このような薄情で残酷なことを述べるのか、と憤

りを頭わにするのである。

これに対して楊仁山は、

既に俗見を以て仏經を測かり、自然に俗見を以て人情を測かり、此の粗弊の語を作すことを怪しむこと無きなり。

と述べ、それは俗世間の見方で以て仏教を推し測るものである。そしてなおかつ自然に俗世間の見方で以て人情を推し測っているのであって、別に不可解なことでも何でもないというのである。

すると今度は龍舟が、楊仁山の四法の捉え方は要領を得たものでないと反論するのである。即ち『陽駁陰資弁続紹』で、

世尊の大覺は、一代の教なり。大小の殊と雖も、教理行果を出でず。此れと我が教行信證と、其の趣は一なり。但だ聖道は則ち理が主なり。故に次の教は理を以てするなり。浄土は則ち事に依るなり。故に理を略して而も信を開くなり。

と述べるのである。

龍舟は、釈尊の説いた正覺の教えは、たとえ大乘小乗という言い方をしたとしても、それはどこまでも教理行果を出たものではない。『教行信証』も同じことである。ただ、聖道門では理が主になり、浄土門では事に依っている。故に今は聖道の理を略して信を開くというのである。そして、教を能詮に、行信証を所詮に配して、それこそ能詮所詮共に本願に配すというのである。

そして更に三願の説を正しく理解すれば、理に於いても文に於いても俗見でないことは明らかであると反論するのである。

一方小栗栖香頂も、

各宗祖師の宗を開くや、必ず偉大の判有り。

と述べて、天台の五時八教、嘉祥の二藏三論、賢首の五教十宗、慈恩の有空中三時を以てそれぞれ一代教を釈しているというのである。天台は法華、嘉祥は三論、賢首は華嚴、慈恩は深密を以てそれぞれ真実教としている。故に浄土真宗の『教行信証』を刪したならば、彼らの説も削らなければならないが、それでよいか、というのである。

周知の如く浄土真宗では、一代教を聖道門と浄土門に分け、更にその浄土を正と傍とに分別し、その正の中でまた真実教と方便教とに分けている。そこで具体的に真実教を『大無量寿経』、方便教を『観無量寿経』『阿弥陀経』

としているのである。故に四教を刪してはならないというのが小栗栖香頂・龍舟の主張である。

それに対して、楊仁山は、

貴宗の如く無量寿經を以て主と為し、而も此の經中の三輩往生の相は、則ち判じて自力と為す。棄して而も取らず。以て全經の血脈と致すは、貫通には能わざるや。

というのである。

楊仁山は、天台、賢首、慈恩等の教判は元々貴宗のように經典を一方的に決めつけるのではなく、自由奔放で縦横無尽である。經典の前後の文の關係性を重視してその真意を探ることが重要であり、任意に内容を押さえることをしてはならないと主張するのである。そして浄土真宗の人々は、ただ『大無量寿經』を主とするに当たり、經典の中に説かれている三輩往生の相貌は自力と判ずるにもかかわらず、そのことを放棄して而も正しく受け取らずして經典の全てとするならば誠に道理に合わないではないかと批判するのである。ここに中国仏教の円融的な考えと、浄土真宗の選択的考えの異なりが見事に露見するのである。そこに浄土門・聖道門二門の越えられない壁があるのである。

そこで龍舟も浄土聖道、自力他力の語句の受け止め方に於いて、『陽駁陰資弁統紹』で、

按んずれば、此の種の疑点は、宗意を起こすに、未だ高懷を透せず。蓋し本宗の自他力の弁は、重々にして相別なり。先ず聖淨を以て之を論ず。聖道は是れ自力なり。淨土は是れ他力なり。三輩九品は亦また仏力に仗り、而も往生するなり。固より是れ他力なり。然に衆生の機類は、本来不一なり。故に仏の接引は、膠柱にして守株を得ざるなり。是に於いて十八の後、別に十九二十の兩願を立つ。接引するに能わずして、直に十八の機に入るなり。之を方便と謂う。乃ち仏力に仗ると雖も。猶お自力を帶する者は、而して經中の三輩の一段なり。正しく其の十九願成就の相を説く。則ち不得不謂の自力なりや。乃ち他力の中の自力なり。是れ全て經の血脈なり。本願の次第なり。當然の所なり。何んが任意の掩抑と謂わんや。

と長々と論ずるのである。

龍舟によれば、淨土真宗に於いて自力他力を論ずる場合は、淨土門と聖道門に分けて論じなければならぬという。聖道門を以て自力、淨土門を以て他力とするのである。故に三輩九品も仏力によつて往生するため他力というのである。つまり、衆生の機根は千差万別であるため不一となり、古い習慣に執らわれて、時機相應に対処することを得られないようなものであるというのである。古来より十八願の外に一九願二十願を立てるのであるが、接引することが出来ないため直ちに十八願の機に入るのである。だから仏力によるといいながらも、三輩段においては、なお自力の域を出ないため十九願成就の文を説くのである。これこそ他力の中の自力であり、淨土真宗の血脈であると主張するのである。

また小栗栖香頂は、『大無量寿経』の

如来、無蓋の大悲をもって三界を矜哀したまう。世に出興したまう所以は、道教を光闡して、群萌を拯ひ恵むに真実の利を以てせんと欲してなり。

〔真宗聖典〕八

の文をもって『大無量寿経』が真実の教であると論証するのである。それは釈尊の出世本懐の本意はただ『大無量寿経』に説かれる阿弥陀の本願を説くことにあつたのである。それはまた例えば天台が『法華経』をもって本懐の経とするのと同じである。故に『観無量寿経』は定散諸行により浄土往生を説くので、あくまでも方便である。『阿弥陀経』は自力の回向を以て念仏往生を説くのであつて、やはり方便の経であるというのが小栗栖香頂の主張である。また小栗栖香頂は、『真宗教旨』で既に述べているが、

聖道の諸教に教行証有り。浄土門も亦た教行証有り。浄土門は大経を以て真実教と為す。弥陀名号を以て真実行と為す。三信を以て真実信と為す。必至滅度を以て真実証と為す。

と、改めて教行証について浄土と聖道の二門に分けて述べている。

『真宗教旨陽駁陰資弁』における四法三願について

浄土真宗では、『大無量寿経』の十七願の「称我名者」をもって真実の行とし、同じく十八願の「至心信樂・欲生我國」をもって真実信とし、また同じく十一願の「必至滅度」をもって真実証としている。故に釈尊の直説である『大無量寿経』を真実の教とし、その教説である本願名号を以て真実行とし、そして十方衆生が『大無量寿経』の教えを信するを以て真実信とし、未来に必ず浄土に往生することを以て真実証となすのである。更に『大無量寿経』の本願成就文に、

諸有の衆生。其の名号を聞きて、信心歓喜せんこと、乃至一念せん。心を至し回向したまえり。彼の国に生まれんと願すれば、即ち往生を得て不退転に住す

（『真宗聖典』四四）

とあるが如く、「其」を真実教、「名号」を真実行、「聞信」を真実信、「住不退転」を「現生正聚必至滅度」として真実証に、それぞれ配している。

以上の如く、小栗栖香頂は事細かく『教行信証』の四法のいわれを述べ、

貴君、虚心平氣にして、此の章を玩味せん。必ず我が祖意の在る所を知ることを得ん。

と、どうか親鸞聖人の祖意をよく熟読してその真意を理解してほしいと請願するのである。



### 三願

小栗栖高頂は『真宗教旨』で、

四十八願の中では第十八願を以て、真実と為す。其の所被の機を、正定聚と為す。真実報土に生ずる。十九二十を方便と為す。十九の機は、諸行を廻向し、止して化土に至る。故に邪定聚と為す。二十の機は或は進んで第十八に入る。或は第十九に退墮する。故に不定聚と為す。

第十八を開説するを大経と為す。第十九を開説するを觀經と為す。開説第二十を開説するを小経と為す。

大経は機教俱に頓なり。觀經は機教俱に漸なり。小経は教は頓、機は漸なり。諸行を捨て、念佛一つを取る。是れ十九を為さめて二十に入る。自力念佛を捨て、他力信心を取る。是れ二十を為さめ十八に入る。

と三願について述べている。

小栗栖高頂は、十八願を真実報土の願とし、正定聚としている。十九二十願を方便化土の願とし、邪定聚としている。そして二十願は十八願に入り、また十九願に退墮するため不定聚としている。そして三部經を以て、第十八願開説を『大無量寿經』、第十九願開説を『觀無量寿經』、第二十願開説を『阿弥陀經』にそれぞれ配している。さらに頓・漸教に関しては、『大無量寿經』は機教共に頓であり、『觀無量寿經』は機教ともに漸であり、『阿

『弥陀經』は、教は頓、機は漸であるという。

最後に小栗栖高頂は、諸行を全て捨てて念仏一つを取ることを十九願をおさめて二十願に入るといい、さらに自力の念仏を捨てて他力の念仏を取ることを二十願をおさめて十八願に入るとしている。いわば、浄土真宗では三願転入を重要な教学であると主張するのである。つまり、真宗では阿弥陀如来の四十八願中の第十九願を諸行往生の方便願、第二十願を自力念仏往生の方便願、第十八願を純他力往生の真実願としているのである。

すると楊仁山は、

浄土に生まれる者は、皆な正定聚に入る。絶て邪定及び不定聚無きこと、經に明文有り。処処に証すべし。若し觀經の所撰を以て、判じて邪定聚と為することは、則ち是れ九州の鉄を聚めて鑄て一大錯を成ずるものなり。

と反論するのである。楊仁山は、往生について三定を立てることはしない。經典自体には邪定聚も不定聚もないと主張するのである。楊仁山にとって、浄土に往生することは、本来、正定聚不退轉の位に住することであり、邪定聚、不定聚と分けること自体が大きな間違いであるのである。もし貴宗において『觀無量壽經』の教えを以て邪定聚とするならば、それこそ中国全土の鉄を聚めて鑄造するが如く大いなる錯誤を成ずるものであるというのである。元々、楊仁山には、浄土三部經で十八、十九、二十願の三願に配当する考え方はない。故に浄土真宗

でいう三経格別論とか三経一致論という見方もないわけである。

すると小栗栖香頂は、

起信論は、十信以前を以て邪定聚と為す。邪とは、三悪道なり。十信を以て不定聚と為す。或は進みて初住に入り、或は退きて三悪に墮す。初住已上を正定聚と為す。正とは聖なり。必ず進みて聖果を得るなり。諸経論は三聚を判ずること一ならざるなり。

と『大乘起信論』により、正・不・邪の三聚について判じている。

元々『大乘起信論』では、「修行信心分」において、

未だ正定（聚）に入らざる衆生に依るが故に修行信心を説く。

（大正三三・五八一c）

と説示している。そして、

修多羅に説くが如く、若し人専ら西方極樂世界の阿弥陀仏を念じて修する所の善根を廻向して、彼の世界に

『真宗教旨陽駁陰資弁』における四法三願について

生ぜん願求せば、即ち往生することを得。常に仏を見るが故に、終に退することあることなし。若し彼の仏の真如法身を観じ、常に勤めて修習すれば畢竟して生ずることを得。正定に住すが故に。

(大正三三・五八三a)

と説かれてある。これは『大乘起信論』が多く影響を受けている『華嚴經』の菩薩道の階位に於いては、信位はどこまでも凡夫位であり、聖位の階位として認めていないことによる。菩薩の階位は、あくまでも十住位以上によるからである。賢首大師法藏も、『探玄記』巻第四で、

信は位を成ぜざるが故に、懸けて十信を問うの言は無く、十住等に同じからず。(大正三五・一六八b)

と述べているが如く、十信は十住等の方便であり、位を成ずることが無いために信の位を菩薩道の中に挙げていないのである。故に信は菩薩道の根拠であり所依となるものであるが位ではないのである。特に菩薩の凡夫位聖位に関しては、『撰大乘論釈』巻第三に、

菩薩に二種あり。一は凡位に在り。二には聖位に在り。初発心より十信まで還って並びに是れ凡位にして、十解以上悉く聖位に属するなり。(大正三一・一七四c)

とあるが如く、凡位の菩薩は初発心より十信に至るまでをいい、聖位の菩薩は十解以上を指すのである。

今小栗栖香頂は、諸経論によって三聚を説くのは同一でないことを論証するのである。特に浄土真宗では、本願に従順するものを正定聚とし、順じない者を邪定聚というのである。第十八願は諸行をもって往生の因となることはなく、ただ念仏をもって往生の因となるというのである。そこで小栗栖香頂は、更に善導の、

一心に専ら弥陀の名号を念じて、行住坐臥に時節の久近を問はず念々に捨てざるは、これを正定の業と名づく、かの仏の願に順ずるが故に。

〔真宗聖教全書〕一・五三八

の文を取意して、念仏往生とは、正定聚不退転の位に住すると述べるのである。そして『観無量寿経』の定散の諸行は仏願に順じないため邪となし、邪を以て願生するのが『観無量寿経』であるので邪定聚となすと主張するのである。

それに対して楊仁山は再び、

観経は是れ仏説なり。何かに仏願に順ぜざると云うや。善導を尊び而も釋迦を慢るは、是れ何の居心や。

と反論するのである。楊仁山にとっては、『観無量寿経』も仏説そのものであり、仏願に順じたものであるはずである。なのにどうして仏願に順じないといえるのか。貴君は、善導を尊敬するあまり、釈尊の教えを慢易するとは一体どういう心持ちなのかというのである。

すると龍舟が『陽駁陰資弁統紹』で、

按ずるに、観経は是れ釋迦仏が定散諸行を説けり。乃び第十九願を開くは、所謂、仏を顕すは、第十八の本願を指すなり。十九は既して方便なり。定散諸行は、第十八願の意に順ぜず。故に邪と為すのみ。

と、『観無量寿経』が釈尊の教えを説いていないわけではない。ただ定散諸行を説いたものであるので、本願文からすれば、飽くまでも十九願の方便として説かれたものである。故に本願を説いた十八願の真実の教に順じないので、邪と為すと説明を加えるのである。

また小栗栖香頂も、

此の邪の言は、本願の行に非らざるを顕すのみ。

と、邪というのは本願の行でないときっぱりと言い切るのである。それは正しく天台の小乗をもって邪見とする

が、小乗は仏教でないかといえはそうではない。浄土真宗は、念仏をもって正というのであって、定散の諸善を邪というたと述べるのである。そして更に、

本宗の三聚、之を現生に立つ。他力の信を得て、而も他力念仏を行ずる。是れ正定聚と為す。自力の信を以て而も諸行を廻向す。是れ邪定聚と為すなり。弥陀經の機、自力を以て而も念仏を行ずる。正定邪定の中間に在り。是れを不定聚と為すなり。

と、浄土真宗の三聚は現世に立つていうと説明を加えるのである。つまり、他力の信を得て念仏を行ずることを正定聚といい、自力の信をもって諸行を廻向することを邪定聚といい、阿弥陀の機に順じて自力をもって念仏を行ずるを不定聚というたと述べるのである。そしてその教証として、龍樹の「易行品」の

人能く是仏の無量力威徳を念ずれば、即ちの時に必定に入る。是の故に我常に念ず（『真聖全』一・二二六〇）

の文をもって、現生正定聚を顯すものであるというのである。浄土に邪定不定の無いことは子どもでもわかることである。浄土真宗は三定聚の現生に立っていることを理解頂き、そして咫尺黒暗とか九鉄鑄錯のような悪口は慎んで頂きたいというのである。

すると楊仁山は、

若し此の本に照らして判断せば、僅に大錯と云う。猶お以て之を尽くすに足らず。

と述べ、どれだけ大錯と言っても言い尽くせるものではないと反論するのである。そこで龍舟が更に『陽駁陰資  
弁統紹』で、

本宗三聚の辯は、他家と同じからず。乃ち教門の褒貶なり。

と説明を加えるのである。三論・天台も全て褒貶の弁は自在であると、楊仁山の大錯という言葉を否定するのである。

すると楊仁山は

觀經は大機に被す。最極円頓なり。一生初住を証すべし。位は、善財・竜女と肩を觀中に齊しくす。仏の授  
記を蒙るは是れなり。何ぞ判じて機教俱に漸と為すことを得んや。



と述べ、『観無量寿経』を最極円頓の経としている。楊仁山によれば、『観無量寿経』は機も教も共に漸となすのか、というのである。すると小栗栖香頂は、

一部の観経は、天台を以て之を見れば、心観を宗と為す。善導を以て之を見れば、念仏を宗と為す。善導は古今を楷定して、上來雖説の判を為す。是れ千古の確言なり。夷の撼すべきに非らざる者なり。

と反論するのである。

『観無量寿経』自体の受け止め方は千差万別である。天台から見れば心観を宗とし、善導から見れば念仏を宗と為すが如くである。今は善導の古今楷定により確信を持って述べるのであるという。つまり、浄土に九品の無いことを真実報土とし、九品そのものの存在を認めて有るとすることを方便化土というのである。浄土真宗では、本来定散諸行は本願の行ではないとみる。そして、本願の行でないことを以て浄土往生を願うのである。そこに九品往生を得る『観無量寿経』の意味があるという。それが化土より真土に往生するというのである。故に『観無量寿経』の往生を機教俱に漸とするのである。

以上が楊仁山の反論である。すると楊仁山は、

仏経の本意を領せず。強いて一解を作し、以て自宗に合せん。苦心思索して之を得る。此れ津津に味有る所

以なり。

と述べるのである。つまり、楊仁山は、浄土真宗の人たちの『観無量寿経』の理解は、仏教の本意を理解したものではない。貴方たちは一つ理解したことを以て全てを自分の宗に合体しようとしている。そこに少々無理があるのではないか、というのである。もちろん釈尊の教えにこの道理がないとはいえない。しかし、十方三世の諸仏の教の中に、この道理はある筈はない。それを凡夫の意思をもちいて一法を捏造し、しかも仏教の上に駕説しようとする罪過は天まで弥ほどのものである、と強く批判するのである。

すると龍舟は、

現在の弥陀は是れ報佛なり。極樂は是れ報土なり。綽導二師は既に之を言う。

と、善導・道綽の説により、弥陀を報仏、極樂を報土としている。眞実報土、方便化土についてはこれまでも何度も述べている。その二土を説き、眞仮を分け、純他力を説くことは、全く仏の本意を領解するものであると主張するのである。また、小栗栖香頂も、

大經は本願の行を以て、報土に生ぜんことを願う。報土なる者は、一種眞妙にして九品の差別無し。往生

即ち成仏。一転して入報土の迂回無きなり。是れ機教俱に頓なり。

と、本願の行をもつて報土に生まれることは、即ち往生成仏することであり、それこそ機教ともに頓であるという。すると楊仁山は、

他力信心者を判じて、九品の上に駕す。往生即ち成仏なり。大經の内に此の義無し。猶お空拳の小兒を誑か  
んが如し。

と批判するのである。楊仁山は、他力信心を九品の上に駕説して、往生成仏と説くようなことは、經典の何処にもない。全く純真無垢な子どもを欺くようなものであるというのである。すると龍舟が、『大無量壽經』の、

道に昇ることに窮極無し。〔『真宗聖典』五七〕

と、同じく

皆な自然虚無の身、無極の体を受けたり。〔『真宗聖典』三九〕

『真宗教旨陽駁陰資弁』における四法三願について

の文と『無量寿如来会』の

阿難、彼の国の衆生、若し當に生ずべき者は、皆な悉く無上菩提を究竟し、涅槃処に到らしめん。

〔真宗聖教全書〕一・二〇三

の文とにより、無上菩提の趣旨を明かすのである。元々『観無量寿經』は十九願を明かしている。その相成として三輩が説かれ、それは全く九品と同じであるという。龍舟は、くどいように浄土真宗の真仮について説くのである。

この四法三願の教理は、浄土真宗の立場では至極当たり前のこととして伝承されてきた。しかし、中国浄土教の立場からは、如何にしても腑に落ちるものではなかった。故に相変わらず、楊仁山と小栗栖香頂・龍舟とは感情的なことも含め平行線をたどるのである。

以上で『真宗教旨陽駁陰資弁』の第五四法・第六三願についての考察は終わる。

注記

(1) 今回は『真宗教旨』の十号の中、第五号四法、第六号三願について考察する。第七号以下は他日に期したい。